Candy
in the Heart
485

行けばわかるだろう

そばにいる母のやせこけた、
疲労している姿を見て、
ふと、僕は思った。
「母の生きがいは何だろう。
僕なんだ、ちび達だ、兄貴だ。」

母に対して、慕う気持ちを、僕は急に強く感じた。

兄貴が宇治へ、家庭教師のアルバイトに行った。
僕が、十八日に学校で、大藤から、借りて来た自転車で行った。

おばとこへ見舞いに行こうかと思ったが、
それで、僕は行けなくなった。

無断で自転車乗って行った
兄貴に対して少し腹がたった。
しかし、思い直した。

「兄貴は今、家の為に頑張ってくれてるんだ。
宇治は歩くには遠い。
電車じゃ金がかかる。
僕自身、今日、必要で、自転車使いたいと
思っていたことは、兄貴には、前もって、僕は言っていない。
兄貴が、乗りやすい方の自転車を使うのは、
僕の考えを知らなかったのだから、当然だ。
そこには、何のおこる要素もない。」

前から母に話していた歯医者に行くことにした。

萩原良昭